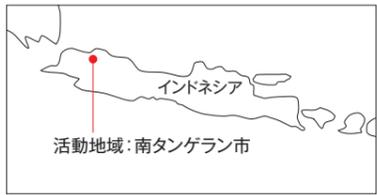


一般社団法人 インドネシア教育振興会

一ジャワ島・南タンゲラン市における  
社会起業型総合環境教育プログラムの開発一

http://www.baliwind.com/

草の根の活動がつないだ  
富山とインドネシアの教育現場



活動地域：南タンゲラン市



子どもたちが読んでいるのは、地球環境基金の助成を受けて作成された教材



教材は子どもたちの反応を確かめながら作成



イタイイタイ病資料館を訪れたインドネシアからの研修一行



富山市立寒江小学校(ユネスコスクール)にあるコンポスの説明を受ける

大学の資源をフル活用し  
活動を拡大

2000年、観光で訪れたインドネシア・バリ島で、雨の中をばたしてモノ売りする子どもたちを目撃した窪木靖信さん(代表理事)。その光景に心を打たれ、地元富山に戻ると、インドネシアに詳しい留学生を紹介してほしいと富山大学に連絡を取ります。そのとき紹介された同大学院生のファディラ・ハシム氏と2人で立ち上げたのが、インドネシア教育振興会です。

その後、窪木さんは、盟友ハシム氏からのアドバイスもあり、「教育についてもっと勉強しよう」と富山大学教育学部(現：人間発達学部)に社会人入学し、さらに大学院へ進学。野平慎二教授(現：愛知教育大学)、根岸秀行

インドネシアの  
教育者による  
教材作成をサポート

教授(現在、同学部附属小学校 校長を兼務)と出会います。2人は、窪木さんの行動力に感銘を受け、できる限りのサポートを約束。学部の学生たちもインドネシアへの研修ツアーに参加するようになり、富山とインドネシアの教育現場がダイレクトにつながるようになりました。

インドネシア教育振興会は、ジャワ島南タンゲラン市にヒカリ小学校を建設し運営していますが、地球環境基金の助成を受けた活動でもいくつかの成果を上げています。その一つが環境教育用の教材作成。一般に教材というと、日本語の教材を翻訳・配布という

形になりがちですが、同団体は「現地事情を反映しなければ効果は薄い」と考えました。教材作成に当たっては、まずインドネシア側の委員を富山大学に招き、教育現場の視察や子どもへの指導方法について意見交換。そして、この研修に参加したインドネシアの大学の先生などが共同で教材を執筆しました。完成したオリジナル教材は5千部印刷し、南タンゲラン市の3地域・20校に約220冊ずつ配布され、授業で使われています。窪木さんいわく「基金の場合、先駆的な活動を理解していただけに、インドネシアからの渡航費も認められます。基金の助成がなければ、このような教材はできなかったでしょう」。現在、この活動は2014年1月に始まったJICAのプロジェクトへと発展しています。



特定非営利活動法人 シャンティ山口

一タイ国・北タイ地域「トウモロコシ栽培で荒廃した農地を果樹林に」  
森林再生と農村開発一

http://www.shanti-yamaguchi.com/

タイ北部・山岳少数民族の  
自立を支援して23年



活動地域：バヤオ県  
セーンサイ村



不法伐採した山の斜面に植えられた  
遺伝子組み換えのトウモロコシ



果樹への転作で緑がよみがえってきた  
山の斜面



村民総出で行われた栽培地に続く  
作業道の補修



2016年2月に20周年を迎えたシャンティ  
学生寮。これまでに270人が集まっている

支援の基本方針は住民の  
自立心を育てること

1993年に設立されたシャンティ山口。以来、タイ北部のラオス国境に接したバヤオ県セーンサイ村を拠点に、モン族を中心とした山岳少数民族の自立に向けた支援を続けています。彼らはラオスからの難民で生活基盤も乏しく、いまだ困難な生活を強いられています。こうした状況の下、地球環境基金のプロジェクトとして、2005年からエコトイレの設置やアグロフォレストリー※の導入などを実施してきましたが、注目すべきはその支援方針です。

佐伯昭夫事務局長は「支援する側が全てお膳立てしては意味がありません。自分たちの問題として取り組

収穫までの数年はガマン  
明日を信じた転作

んでこそその支援です。例えばエコトイレなら、設置するとう生活が変わるのか?そこをまず理解してもらいます。そして、設置工事も自分たちの手で。工事しながら仕組みを理解すれば、自身で補修できますからね。こちらで設置して「はい、どうぞ」では、いつまで経っても自立できません。自らの問題として取り組むのが何より重要」と強調します。

※植林し、その樹間で家畜農作物を飼育栽培する農林複合経営

今、セーンサイ村近くのホイブム村では、遺伝子組み換えトウモロコシの過剰な栽培地拡大により、森林消滅や農業散布による健康被害、農地荒廃、

水源枯渇などの問題が起きています。トウモロコシの収穫量アップを望んだものの、結果的には多くの問題を抱えることに。シャンティ山口は地元村民のモン族と共にこの問題に取り組みたいですが、理想論を振りかざして、彼らに転作を強要することはありません。決めるのはあくまで村民なので、希望者にラムヤイヤマンゴーなどの苗を支給し、果樹への転作を支援しています。ただし、本格的な収穫は数年先……。佐伯さんによれば、転作を完了した村民は自らは満足しているものの、本格的な収穫ができるまでは家族を村に残し海外へ出稼ぎに行くのが現実だそう。残された家族は苗木を管理するともに、果樹間に植えたインゲン豆や落花生などで現金収入を得ています。こうした厳しい現実を覚悟して、希望に満ちた転作なのです。